

第111号

発行日 2023年1月吉日
発行責任者 鳴原 久
編集・印刷 齋藤 馨



年頭挨拶



大旦町会
会長 鳴原 久

今年もコロナウィルスに負けず できる事を精一杯やろう!

大旦町会の皆様、明けましておめでとうございませう。昨年は大雪の新年を迎え、通勤通学や買い物にも支障が出て、三月には二年連続の大きな地震があり、皆様の家屋や塀などに被害が出て市に被害報告と支援要請を行いました。自然災害に備える大切さを痛感した年でした。今年は、皆様に穏やかな年が訪れるよう願っています。町会活動は、コロナウ

イルスの感染対策を図りながら、桜土手の花壇に植栽やゴミ置場のネット修理などの環境衛生活動と、皆様のご協力を得て二度の全市一斉清掃も行いました。

また、一月三〇日からは大旦町会ウェブサイトを開設し、必要な情報提供を始めました。

今年は、新型コロナウイルスの状況を考慮して、桜祭りや夏祭りを皆様と楽しみたいと考えていますので、ご協力を宜しくお願いいたします。



立派な門松で 新年を迎える

新年を迎える

一月二十九日、町会と愛宕神社氏子会が共同で大きく立派な門松を、集会所と愛宕神社にそれぞれ一対ずつ飾りつけ、新年を迎える準備が整いました。

第五班の尾形多門さんから、太く長い青竹、真っ赤な実がたわわに付いている南天、生き生きとした大きな松等の提供を受け、更には作



り方までご指導頂き、立派な門松が出来上がりました。

令和四年はコロナウィルスに翻弄されましたが、参加された皆さんは、来年こそは穏やかな年になることを願い「良いお年を」と挨拶を交わして解散しました。



愛宕神社から令和5年の初日の出を拝む

その雲どいてくれ！何とか瞬間的に顔を出し、急いで手を合わせる

もちずり地区文化祭 大旦町会が出展

大旦町会では一月五日～六日に開催された文

化祭に大旦開基四百年関係の資料と、昭和二年に米



国から日本の子ども達に贈られた「青い目の人形」を展示し、市内外から両日合わせて三百名近い方々が来場され、平和の尊さを改めて感じ取っていました。



2023年

謹賀新年

新年明けましておめでとうございませう コロナウィルスとインフルエンザ感染に注意を



定例役員会開く（一二月四日）

今後の主な事業について協議

一二月四日、定例役員会を開催し、嶋原会長から、一年間大きな問題もなく事業が実施できたことについて、労いの挨拶がありました。

引き続き次の件について協議・決定しました。

1. 班長・役員合同会議及び忘年会は実施しない。
2. 総会開催方式について、集合か書面表決のいずれにするかの判断は、現時点では集合方式とし、コロナ感染状況を見ながら改めて判断する。



開催日程は集合方式の場合は二月二日（日）、書面表決方式の場合は二月一九日（日）とする。

3. 新班長・役員合同会議を二月二六日に開催するが、対面か文書通知か検討する。



【挨拶する嶋原一雄代表】

熊野神社祭礼齋行 桜鼓会が奉納演奏

一二月四日、集会所西側に建つ行屋で熊野神社祭礼を執り行い、町内発展・家内安全を祈願しました。

この日「桜鼓会」も参加し、奉納太鼓を演奏し、雰囲気盛り上げました。

この行屋は明治一九年に新築され、現在は毎年一二月の第一若しくは第二日曜日に祭礼を執り行っています。

= 大旦町会 = Webサイトを開設する 町内情報を掲載中！



下記の通り検索すると ①「町内からのお知らせ」

②「活動報告」を見ることが出来ます。

■【福島市ホームページ】⇒【電子町内会ウェブサイト】

⇒【東部支所】⇒【東部地区】⇒【大旦町会】

チューリップの球根

二百球いただきました

第二班の齋藤正紀さんから、チューリップの球根を二百球もいただきました。早速集会所の十六個のプランターに植えました。



楽しませました。大変難しい作業でしたが、楽しみながら行いました。

今年度最後の役員会

開く（一月八日）

- 令和五年度総会開催に伴う具体的な取り組みについて、次の通り協議しました。
1. 総会開催方式について対面か書面か協議した結果、対面方式で実施する。
 2. コロナ感染防止対策として、会場をスペースが取れるもちすり学習センターのホールとし、体温測定・消毒を徹底する。
 3. 大会役員の選定については、当日の参加代議員の中から就任要請する。
3. 新班長と役員との合同会議を二月二六日に対面方式で開催する。



コラム

♪ 日記はつづくーよ
どーこまでもー♪



新年の目標の一つに、日記を毎日書くことを上げた。いつ頃から書き始めたのだろうか。古い日記を調べてみたら一九八九年からで、三五年位前のようだ。

最初の頃は空白のページが目立った。習慣化していないからだ。年数が経っていく内に空白が次第に少なくなっていくた。

始めた頃の日記帳は一日一頁で、欄が多すぎて書くのが億劫になる。そこで、一頁が三分に分割されているものを買ってみたら、欄が狭いので書く気が起きた。

一昨年も昨年書かない日が一昨日だけだった。風呂から上がると「書くもんだ」という気になり、習慣化したのだろう。

書くきっかけは、自分が生きてきた証（あかし）が何も残らないことへの抵抗だろう。

時々「あの時はいつだったろうか、誰だったろうか」とか知りたいときには、ページを開くと答えが載っている。脳トシにもなるかな。

【齋藤 馨】